大阪商業大学学術情報リポジトリ

第一次世界大戦直後のイラン為替危機

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2022-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水田, 正史, MIZUTA, Masashi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1145

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

第一次世界大戦直後のイラン為替危機

水　田　正　史

はじめに
第１節　為替危機
第２節　貿易ルートの転位と金銀の禁輸
おわりに

はじめに

第一次世界大戦期、イランは諸外国の戦場となり、国土を蹂躙された。戦争末期には飢饉が発生し、これにスペイン風邪と呼ばれるインフルエンザの世界的な流行が加わった。開戦以前に破綻していた財政は改善しないままであった。北部にはジャンギャリーという反帝国主義・反中央政府の武装勢力が活動を展開しており、南部も治安が劣悪であった。このように、イランは、今日よく使われる表現でいえば、破綻国家なのであった。

それでは、この破綻国家の経済の実態はどうであったのか。本稿はこの点を、貿易面に焦点を絞って解明することを目的とするものである。

史料は、イギリスの貿易省（Department of Overseas Trade）の報告書を使用する。

第１節　為替危機

まず、1920/21年[1]報告から見ていこう。顕著なのは、表１の通り、戦前に比べて輸出入額、特に輸入額が激減していることである。そして、戦前も戦後も大幅な輸入超過（以下、入超）である（以下、史料の抄訳は改行し各行の出だしを下げて記すこととする。それらと筆者自身の見解とを峻別するためである）。

1）西暦の1920年の春分から1921年の春分の前日までをこのように表記することとする。イランで使われている暦の１つであるヒジュラ太陽暦では、１年は春分に始まり翌年の春分の前日に終わる。

表1　戦前と戦後のイランの貿易（ゲラーン建）

（単位：ゲラーン）

	1913/14年	1920/21年
輸入額[1]	647,000,000	482,000,000
輸出額[1, 2]	447,000,000	138,000,000

注1：輸出入に目に見えない輸出入は含まれない。
注2：輸出に石油は含まれない。
出所：Temple［2］p.5

その入超の結果、銀行の外国送金のための資金が破壊点にまで達するに至った。このため、輸入業者たちは外貨を購入できず、銀ゲラーンを地金の価値で輸出するケースが生じた。この通貨の悪用（傍点水田、以下同様）は法律によって禁止された。そこで、彼らは、外国の銀の買い手にゲラーンを密輸出した。これも阻止されたが、おそらくまだ続いているであろう。

さらに、外国コイン[2)]、装飾品、宝石類、食器類といったあらゆる種類の金銀が輸出のために動員されたが、これも税関の命令によって禁止された。

もはや他に手段はなく、輸入はほぼ停止した。そして、対ポンド為替レートは、1年前の1ポンド＝30ゲラーン未満から1ポンド＝50ゲラーン（1月29日時点では1ポンド＝60ゲラーン）へと低下した。だが、この途方もないレートでもスターリングを購入することはほぼ不可能であった（Temple［2］p.5）。

それでは、どうすればよいのか。入超の解消には、具体的にどのような方法があるであろうか。報告者テンプルは以下のように述べる。

イランの場合、国民による国内の開発が行なわれないならば、善意による外国からの援助に頼るしかない。なぜならば、今のイランには大規模な企業を呼び込む誘因はほとんどなく、利用可能な資本がほとんどあるいはまったくないからである（Temple［2］p.6）。

ここで、「ほとんどあるいはまったくない」のは「資本」ではなく「利用可能な資本」であることが注目される。

銀ゲラーンを豊富に有する商人たちもいた。すなわち、銀そのものが絶対的に不足していなかった可能性もある。問題は、彼らが銀行に、スターリングを売らせる気にさせることができなかった点にある。イランの通貨は国外では購買力を失ったのである。

2）鋳貨という表現は使わない。なぜなら、鋳造以外の方法で造幣されたコインが含まれる可能性が高いからである。

表２　戦後のイランの貿易（ゲラーン建）

（単位：ゲラーン）

	1919/20年	1920/21年	増減額
輸入額	629,792,656	482,351,633	△147,441,023
輸出額	367,817,353	371,198,779	3,381,426
計	997,610,009	853,550,412	△144,059,597
入超額	256,975,303	111,152,854	△145,822,449

出所：Temple［2］p.6

この表２をスターリング建に変換すれば表３となる。

表３　戦後のイランの貿易（ポンド建）

（単位：ポンド）

	1919/20年	1920/21年	増減額
輸入額	23,154,141	9,637,395	△13,516,746
輸出額	13,522,696	7,416,559	△ 6,106,137
計	36,676,837	17,053,954	△19,622,883
入超額	9,631,445	2,220,836	7,410,609

出所：Temple［2］p.7

輸入を制限する法案が最近議会に提出されたが、これは錯覚のためである。もちろん、支出が収入を上回る国は支出を切り詰めなければならないのだが、輸入の78パーセント以上が生活必需品（砂糖、綿織物、茶）であるため、切り詰める余地は少ない。また、イランでは１人あたりの購買力が小さい。この点からも、イランは輸出増に目を向けるべきなのである（Temple［2］pp.6, 9）。

次に、報告者テンプルは「貿易」という節に移り、「貿易収支」という見出しを掲げて、1920/21年の国際収支を前年と比べている。なお、ここで、1920/21年の輸出額が表１のそれと大幅に異なっているが、この差異はアングロ・ペルシャ石油会社（以下、APOC）の輸出を含めるかどうかによるものであると思われる。このことは、この差額（233,198,779ゲラーン）が、後述の表５の同年の入超額から表４のそれを引いた額（233,446,529ゲラーン）とほぼ一致することによって裏づけられる。

次に、戦前から戦後までの12年間の入超額と輸出と輸入の構成比を掲げる。APOCの輸出額を含めた場合が表４、含めない場合が表５である。

どちらの表も、下記の点で共通している。

① 開戦時およびその後の２年、入超が急減。

② 終戦前年、終戦の年、その翌年に入超が急増。

③ 1909/10年から1912/13年まで入超額が同じ。

表4　戦前、戦中、戦後のイランの貿易（ゲラーン建、APOC の石油を含めた場合）

（単位：ゲラーン）

年	輸入（%）	輸出（%）	入超額
1909/10	54	46	70,902,327
1910/11	56	44	109,080,728
1911/12	58	42	149,423,658
1912/13	57	43	131,242,368
1913/14	59	41	191,325,206
1914/15	56	44	103,265,047
1915/16	55	45	86,973,351
1916/17	53	47	60,875,671
1917/18	58	42	129,351,521
1918/19	64	36	205,417,850
1919/20	63	37	261,975,303
1920/21	57	43	111,152,854

出所：Temple［2］p.7

表5　戦前、戦中、戦後のイランの貿易（ゲラーン建、APOC の石油を含めない場合）

（単位：ゲラーン）

年	輸入（%）	輸出（%）	入超額
1909/10	54	46	70,902,327
1910/11	56	44	109,080,728
1911/12	58	42	149,423,658
1912/13	57	43	131,242,368
1913/14	60	40	209,089,833
1914/15	58	42	136,617,029
1915/16	57	43	107,834,796
1916/17	57	43	126,502,212
1917/18	66	34	223,308,822
1918/19	80	20	360,350,813
1919/20	77	23	442,403,603
1920/21	78	22	344,599,383

出所：Temple［2］p.8

この③から APOC の輸出額は一定であることが分かる。

以上のように終戦直後のイランは入超による為替危機に陥っていた。この危機をどうすれば脱することができるのか。報告者テンプルは、上記の通り輸出を増やすべきだと述べているが、それでは輸出増のためにはどうすべき、といった具体的な案は示していない。

第 2 節　貿易ルートの転位と金銀の禁輸

翌年も入超は大きくは改善しなかった。

貿易について、大戦によって大きな変化が生じた。貿易ルートが転位（dislocation）したのである。すなわち、戦前は輸入の大部分は、アンザリーなどのカスピ海諸港とタブリーズ・トラブゾンルートを通じるものであったが、1921/22年にはこの「北ルート」を通じた輸入は8.4パーセントに激減し、これに対してペルシャ湾諸港[3)]、イラク、インドを通じた輸入が91パーセントを占めるに至ったのである。

この貿易ルートの転位は少なくとも２つのルートを繁栄させた。両ルートとも戦前にはめったに使われていなかった。

１つはバスラからバクダードを経由してケルマーンシャーへと至るイラク・ルートであり、もう１つはインド・ルートである（Hadow［1］pp.9-11）。

前者から見ていこう。

このルートはイラン商人に戦前から人気がある（popular）ルートであり、バスラからバグダードを経て対イラン国境のハーネギーンに至るイラク鉄道の完成により、壊れやすい、あるいは腐りやすい商品の輸入がより容易になったのである。

「北ルート」の実質的な閉鎖（virtual closure）の影響も大きかった。

このイラク・ルートを通じて多くのマンチェスター産の反物が輸入されている。1919/20年のブーム期、ゲラーンの価値が大きく増加したことにより、イランの輸入商人の手元に在庫が蓄積したが、翌1921/22年には、この在庫はゲラーンの価値が減少したため、売れ残ってしまった。これは、ゲラーンの減価によりスターリングで支払うことが困難となったためである（Hadow［1］pp.10-11）。

次に、後者のインド・ルートについてである。

このルートは、ヌシュキ・ドズダーブ鉄道によってインドとイランをつなぐものである。ドズダーブは、サルハッド砂漠によってインドと隔てられているという地理的条件により、大戦中の同鉄道の建設によってイランの主要な流通センターの１つへと上昇を遂げた（Hadow［1］p.11）。

ここで、両ルートとも、その繁栄の原因の少なくとも１つが鉄道であったことに注目しておきたい。

次に、輸出入の国別の構成を見てみよう（表６）。

3）these three countries と言い換えているので、この「ペルシャ湾諸港」は湾岸アラブ諸地域のことか。

表6　1921/22年のイランの主要貿易相手国（上位5か国）

（単位：ゲラーン）

	輸入額	輸出額	輸出入額
イギリス帝国[1]	462,100,000	159,000,000	621,100,000
エジプト	17,500,000	199,400,000	216,900,000
ロシア	41,700,000	26,500,000	68,200,000
イラク	8,300,000	44,400,000	52,700,000
アメリカ合衆国	5,500,000	29,500,000	35,000,000

注1：「インドを含むイギリス帝国」とある。他のイギリス帝国領が含まれるのかは記されていない。

出所：Hadow［1］p.12

この表にみられる通り、輸出入合計ではインドを含むイギリス帝国が最大の相手先である。ただし、注意しなければならないのは、イギリスやインドから輸入される商品の中には、イギリスで生産されたもの以外も含まれている、という点である。

対イギリス帝国貿易の輸出と輸入の不均衡により、イギリス市場とインド市場において、ゲラーンが減価した（Hadow［1］p.12）。

次に、輸出入額を品目別に多い順に掲げると以下のようになる。

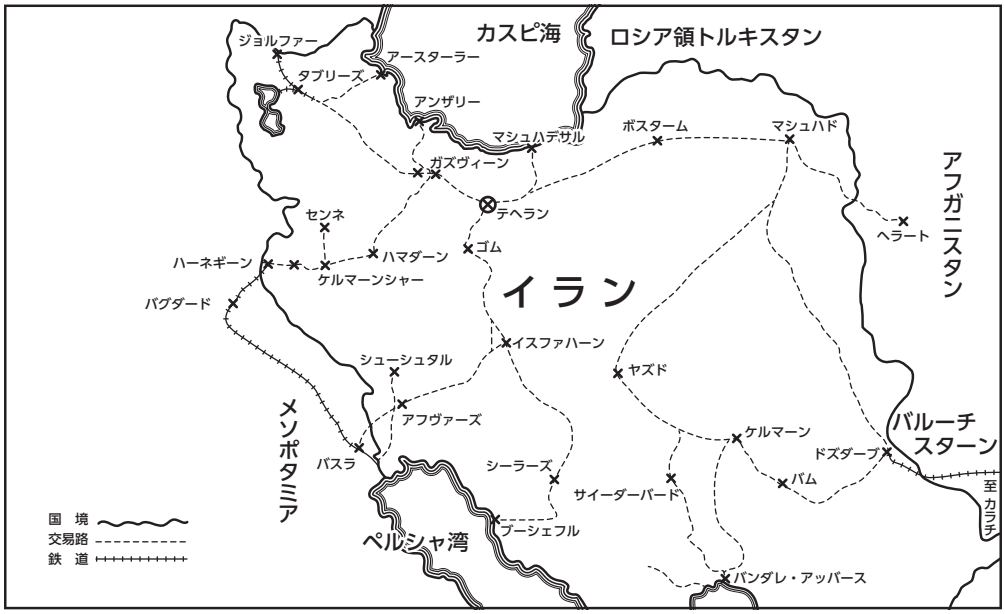
［輸入］

綿の反物	188,600,000
砂糖	141,300,000
釘、ねじ、鉄管など	33,200,000
茶	31,300,000

［輸出］

石油および関連製品	322,600,000
絨毯、敷物	66,100,000
果実（乾燥、生鮮）	26,900,000
アヘン	15,400,000

輸入の内、綿の反物、釘、ねじ、鉄管は、そのほとんどがイギリス帝国からのものである。砂糖もほぼ半分がイギリス帝国（インド）からのものである。ただし、インドから輸入された砂糖の中には、オランダ領東インドから出荷されたものが含まれていることが知られているし、また、おそらく、フランス、エジプトなどからの商品がインドからドズダーブ、ペルシャ湾経由で再輸出されたものも多く含まれているのではないかと考えられる（Hadow［1］p.12）。



イラン略図

輸出の大部分は APOC の石油および関連製品である。これらはまずエジプトへと送られる。エジプトがイランの輸出先の第 2 位に位置しているのはこのことによる。

イラン・アヘンはモルヒネの含有量が多く、このため、翌1922/23年には、南イランの圧倒的に利の高い貿易はペルシャ湾経由のアヘン輸出であった。

南イランの広大なケシ畑でケシに代わるものが見つからない限りは、国際連盟によるアヘン販売の制限が深刻な打撃となるであろう。

1921/22年のイランの輸出品目の内、アヘンに次ぐのはゴムと金銀である。この内、金銀の輸出は翌年を通じて停止した。これは国民議会があらゆる形態の金銀輸出を禁ずる法律を可決したからである（ただし、イラクの聖廟への巡礼が10トマーンを携行することは禁止から除外された）。

のちに、この法律は、海路輸送される正貨を含むすべての金銀をも禁ずるよう修正された。それらの多くは、イランの港からペルシャ湾の他の港へ運ばれることが常であった。その際には税関によって沿岸貿易（cabotage）の封印がなされた。これは、陸路、貨幣を送ることが困難だからであった（Hadow［1］p.13）

この措置が採られたのは、1921年と1922年の貿易収支の入超とそれに伴うゲラーンの減価によってイラン商人が恐怖を感じたからであった。特にイギリスとインドに対しては大幅な入超で、従って、両国の通貨に対してのゲラーンの減価が大きかった。

このゲラーンの減価により、ゲラーンの輸出が有利となった。ゲラーンのほうが銀含有量が多かったためである。このため、イラン商人は、間もなくイランから銀貨が完全に枯渇してしまう、と主張した（Hadow［1］pp.13-14）。

この確信は、大都市において一時的に銀不足が生ずるという事実によって強まった。この銀不足は、イランにおいては正貨の輸送が困難であることによって生じるものである。

だが、この沿岸貿易の禁輸は修正された。というのは、この禁令は、通貨の自由流通を妨げ、APOC のイラン人被雇用者への支払いをほぼ不可能にするからであった。ルピーの輸出禁止も破棄された（Hadow［1］p.14）。

以上の金銀禁輸に関する記述は、「立法」という見出しのもと、記されたものであるが、この「立法」のセクションの最後に、国民議会がアメリカ人財政顧問に500万ポンドの借款を交渉する権限を与えた、との記述がある。このアメリカ人財政顧問とはミルズポーのことである。イランの財政改革のためにアメリカから派遣された。

報告者は最後に「結論」という節で、以下のように議論を総括している。

イランは、財政改革、車の通れる道路の建設、そして道路利用税および道路利用料の厳格な徴収、この3つさえ与えられれば、早急に交易を復活させることができるし、国民の物質的繁栄をもたらすことができる（Hadow［1］p.16）。

おわりに

ハドウは報告書の「結論」で、破綻国家の再生の条件を以上3点列挙しているわけであるが、その理由などについては述べていない。この点については、機会があれば稿を改めて論じることとしたい。

［付記］

この研究は平成30年度大阪商業大学研究奨励助成費を受けて行なったものである。

文献リスト

［1］Hadow, R.H., Report on the Trade and Industry of Persia to June, 1923, Great Britain, Department of Overseas Trade

［2］Temple, B., Report on Trade and Transport Conditions in Persia to January, 1922, Great Britain, Department of Overseas Trade